佐藤春夫記念館建設に伴う

速玉大社境内遺跡発掘調査概報

1989. 3

財団法人 和歌山県文化財センター

序

紀州の南部に位置する熊野地方は、海・山・川の豊かな自然に育まれ、古来より神話と伝承に彩られた独特の文化を培ってきました。また、そうした背景に支えられながら、熊野三山信仰として花ひらき、古人の心のふるさととして多くの人々の“浄土”を現出してまいりました。

今回、その熊野三山の一社、新宮市の熊野速玉大社境内に佐藤春夫記念館がオープンすることになり、喜びにたえません。申すまでもなく、佐藤春夫先生は新宮市出身で、望郷詩人と呼ばれるほど深くふるさとを愛され、まさに熊野の自然と歴史・風土が生んだ芸術家の代表であります。

今般、その記念館建設にあたり熊野信仰のメッカの一角を発掘調査し、熊野詣盛期の大規模な掘立柱建物跡や多数の陶磁器などにはなやかな熊野三山信仰の一端を垣間見ることができました。

ここにその概要報告書を刊行することになりました。本書が熊野三山信仰史の究明にいささかでも役立てば幸いであります。

最後になりましたが、この調査を実施するにあたり、ご協力いただいた関係者の皆様のご理解ご助力に改めてお礼申し上げるとともに、今後なお一層のご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

平成元年３月30日

財団法人 和歌山県文化財センター
理事長　仮　谷　志　良

例　　言

1．本書は新宮市速玉大社境内に建設される地元出身の作家佐藤春夫の記念館建設に伴う発掘調査概報である。

2．発掘調査は、財団法人和歌山県文化センターが、新宮市から委託を受け、和歌山県教育委員会の指導を得て実施した。

3．発掘調査は、上田秀夫が担当した。調査現場では新宮市教育委員会事務局諸氏の大なる助力を得た。記してお礼申し上げる。

4．本書の編集には上田があたったが、出土遺物の項の執筆及び遺物写真撮影、遺構、遺物のトレースを土井孝之が分担した。

5．本書で使用した遺物番号は本文、図版においてすべて共通する。

目　　次

序

例　言

Ⅰ　位置と環境 …… 1

Ⅱ　調　　査 …… 1

　1　遺　　構 …… 2

　2　遺　　物 …… 2

小　結 …… 3

図・図版　目　次

第1図　位置図及び周辺の遺跡 …… 1

第2図　遺構実測図 …… 4

第3図　遺物実測図1 …… 6

第4図　遺物実測図2 …… 7

図版1　遺構写真1 …… 8

図版2　遺構写真2 …… 9

図版3　遺構写真3 …… 10

図版4　遺物写真1 …… 11

図版5　遺物写真2 …… 12

Ⅰ　位置と環境

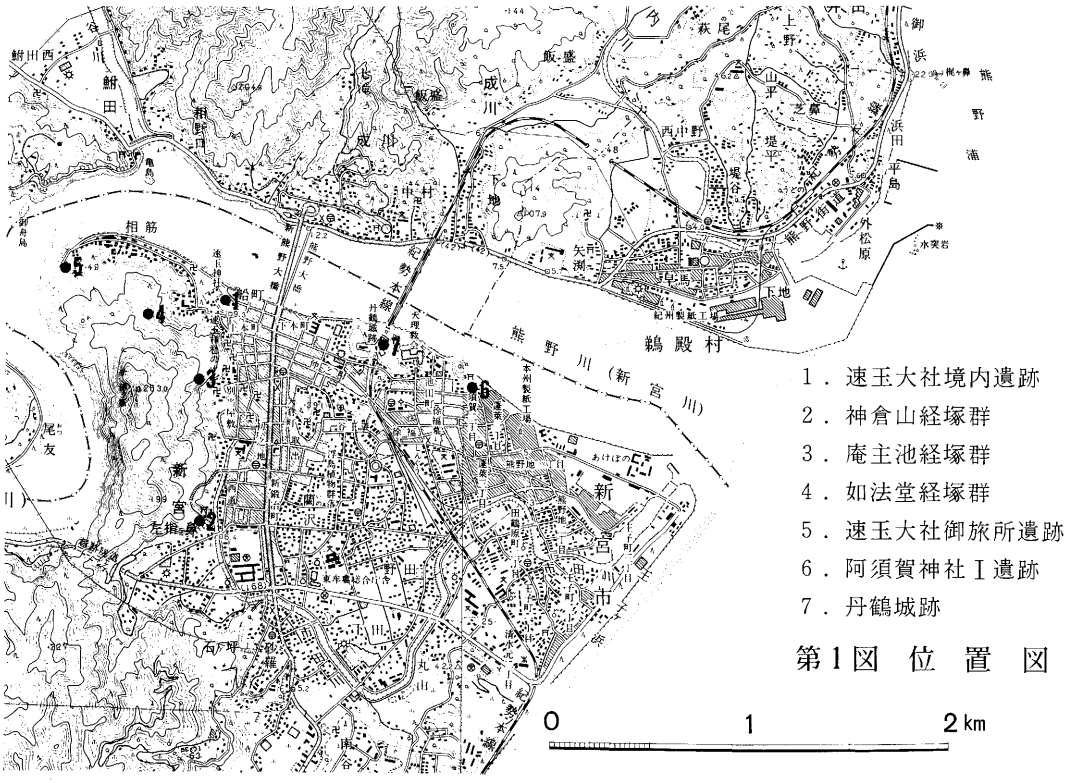
速玉大社は新宮市の北端、三重県との境を流れる熊野川河口近くの右岸、新宮市西方にそびえる千穂ケ峯（標高253m）の北東麓に位置する。那智大社、本宮大社と並ぶ熊野三山の一社で俗に熊野新宮という。浄土信仰の興隆に伴い、平安時代から鎌倉時代にかけて千穂ケ峯を主峰とする権現山には神倉山・庵主池・如法堂経塚群などいくつかの経塚群が知られている。これらは新宮経塚群と総称され、いづれも速玉大社を核として造営されたもので、古来より聖地として信仰の対象にされていた。

速玉大社境内は昭和33年の神宝館建設の際に縄文時代中期前半から後期後半にわたる土器が発見されたことにより縄文時代の遺跡として知られ、これを速玉大社境内遺跡と呼んでいる。又、周辺の遺跡には、縄文土器の出土する速玉大社御旅所遺跡、弥生時代の住居跡や土師器、須恵器が出土する熊野川河口右岸の阿須賀神社Ⅰ遺跡、速玉大社東方の丹鶴丘陵の丹鶴城跡などの数多くの遺跡が知られ、一種独特の文化圏を形成している。（第１図）

Ⅱ　調　　査

発掘調査は地元出身の作家佐藤春夫の記念建設に伴うもので、調査面積は約160㎡である。

調査地点は熊野川に近い境内域北東端に位置する。縄文土器の出土した神宝館は調査地点の西約



第1図　位　置　図

20mにあり、今回の発掘調査においても縄文時代の遺構、遺物の検出が予想されていた。しかし、県教委による試掘調査では、縄文時代の遺構、遺物はまったく検出されていない。

a　遺構（第２図、図版１～３）

調査区が河岸に近いため、旧地形は熊野川に向かって徐々に下降している。調査区全体に近代の厚い整地土が堆積している。この整地には相当の削平が伴っていたと思われ、平安時代及び近世の遺物を大量に含んでいる。近世の遺構は削平により失われたと思われるが、中世の遺物の出土は極めて少なく、中世の遺構は存在しなかったものと思われる。

調査地区の基本層序は、第１層が近代整地土で、第２～４層が平安時代の包含層である。平安時代の遺構は第４層除去後、地山と思われる黄褐色土上で検出されるが、第２～４層の出土遺物に時期差が認められないことから、これらは同時整地層と思われる。なお、河岸に近いためか全体に砂質土である。検出した遺構は掘建柱建物跡や柱穴、土坑などで、第２層から切り込む少量の江戸時代の遺構を除くと大部分が平安時代の遺構と思われる。（第２図、図版１）

掘建柱建物ＳＢ01（図版２）は調査区のほぼ半分を占める大規模な建物で、南北７間、東西２間を検出している。この建物は総柱で、高床状の構造と思われるが、１間の間尺が225cm程のものから280cm近いものまであり、構造や性格が不明である。又、これだけ大規模な建物であるので何らかの記録が残されている可能性があり、今後の課題としたい。

掘建柱建物ＳＢ02～04（図版２～３）は大半が調査区外に出るため東西の規模は不明であるが、いづれも南北３間程度の小規模な建物である。互いに重複するが柱穴の切り合いはなく、前後関係は明らかではない。これらはＳＢ01と方位を一にするが、東側１ｍ程度に近接するためＳＢ01と併存した可能性は少ない。

直径１ｍ前後、深さ20～30cmの土坑群（図版３）は調査区全体に見られるが、特に北端部に集中している。山茶碗の完形品を出土するものなどが見られ、その性格が注目されるが、土器類以外の遺物がなく、詳細は不明である。

なお、ＳＫ３は長辺３ｍ、短辺２ｍ前後、深さ10cm程の不整形土坑である。遺構の輪郭はあまり明らかではないが、内部は焦土や焼土で埋まっている。遺物がまったく出土しないが、少なくともＳＢ01などの建物群より古い時期のものである。

b　遺物（第３・４図、図版４・５）

出土遺物の大半は平安時代後期のものと近世のものである。その中で平安時代の遺物では山茶碗が85％を占め、土師器椀・皿が約10％、残り約５％が土鍋、常滑焼、中国製白磁碗などである。近世のものは大部分が瓦や国産陶磁器類である。

包含層出土遺物（１～31）

第１層近代整地土（１～18）から近世の陶磁器や平安時代の山茶碗が大量に出土している。この層は表土以下黒褐色土まで分層できるが、すべてに近代の遺物を含んでいるので一括して近代整地土とした。伊万里染付碗（３）、灰褐色で透明度の高い釉のかかる信楽焼と考えられる小杯（４）、備

前焼摺鉢(5・6)、唐津焼碗(11)などの国産陶磁器や、土師質焙烙(1)、内面に粗い刷毛調整を施した土師皿(7・8)、口縁部を強くヨコナデする土師皿(9)、体部内外面を粗く篦削りした後、口縁部を強くヨコナデし、体部内外面の約半分が2次焼成のため桃色を呈する土釜(10)などがある。(12～14)は山茶碗で、(15～17)は山茶碗の小碗である。(18)は近江産と思われる緑釉の小皿である。釉色は濃緑色で、胎土は暗灰色を呈し緻密である。

第2層(19～22)・第3層(23)・第4層(24～31)は一括の整地土と考えられ、遺物にも時期差は認められない。第2層に比較的多くの遺物が認められるが、第3、4層の遺物は小量である。土師皿(19～23)、山茶碗(20. 21. 24～29)、口縁部の屈曲の著しい山茶碗の小碗(22)などの他、口縁部を凹線により窪ませて口縁をやや玉縁様にした軟質の白磁碗(30)、口縁部を外反させ、端部を丸くおさめた白磁碗(31)など少量の中国製白磁類も出土している。

遺構出土遺物(32～66)

近世の遺物には伊万里染付草花文碗(34)・染付向付(35)、明褐色の釉のかかる丹波系と考えられる壺(38)などがある。美濃瀬戸系天目茶碗(33)は中世のものであるが、近世の遺構への混入である。

平安時代の土師器は回転糸切りの皿(39)、体部が厚く口縁部をヨコナデにより薄く外上方に引き上げた皿(47. 62)、粗い胎土で外面を刷毛調整、内面に板ナデ調整を施した鍋(64)などがある。土師皿は全般に淡黄色を呈し、胎土は緻密であるが、小皿(57)のみ赤褐色を呈し、少量の砂粒を含む。その他、土師器には高台付の椀が少量認められる。

山茶碗は量的に遺物の主体を占めるものの、変遷をたどりえる良好な資料ではない。以下にその概要を簡単に述べる。出土する山茶碗はすべて回転糸きりの後高台を貼付けたもので、低い高台を有するものには高台端に籾殻痕の見られるもの(20. 28. 44. 45. 51. 53. 58. 65)がある。胎土は大別して、砂粒を含まず堅緻なもの(16. 21. 22. 27. 43. 46. 49. 56. 59)、少量の砂粒を含み堅緻なもの(17. 25. 26. 28. 36. 37. 42. 52. 53. 58. 60. 65. 66)、多量の微砂粒を含み堅緻なもの(12～15. 44)、多量の微砂粒を含み堅緻でないもの(24. 32. 54. 55. 63)の4種に区別できる。これらの大半は本部内面から口縁部外面にかけて薄い自然釉の付着が認められる。また、(49. 54)の底部高台内には赤色顔料の塗布が認められる。

その他、古墳時代の須恵器蓋杯・甕、土師器甕、平安時代の灰釉長頸壺・碗・輪花碗、中国製の白磁玉縁碗などが少数出土している。

小結

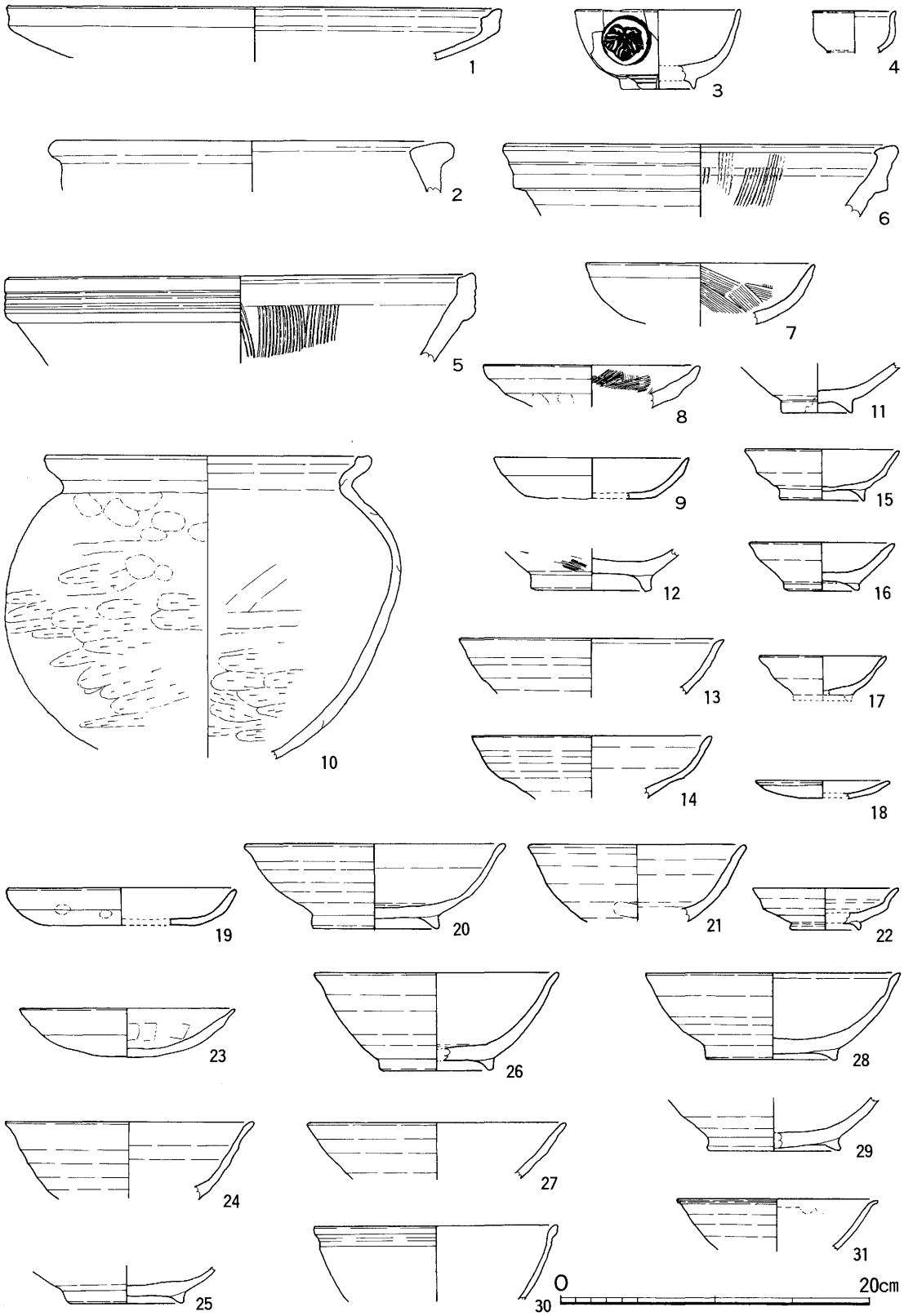
調査区が狭小なため遺構の性格、建物の規模等不明な点が多い。今後の課題として残るものの一つは、文献資料等からのＳＢ01やＳＢ02～04などの建物跡の性格付けである。

今一つの課題は焼土の入った土坑ＳＫ13の性格の解明である。なお、遺構として認識できるほど明確ではなかったが、ＳＫ13の東側にも微細な炭化物の広がりが認められる(第2図)。縄文土器の出土は一片も認められないが、これらが縄文時代の遺構の可能性があり、今後の検討が必要である。

第２図　遺構実測図

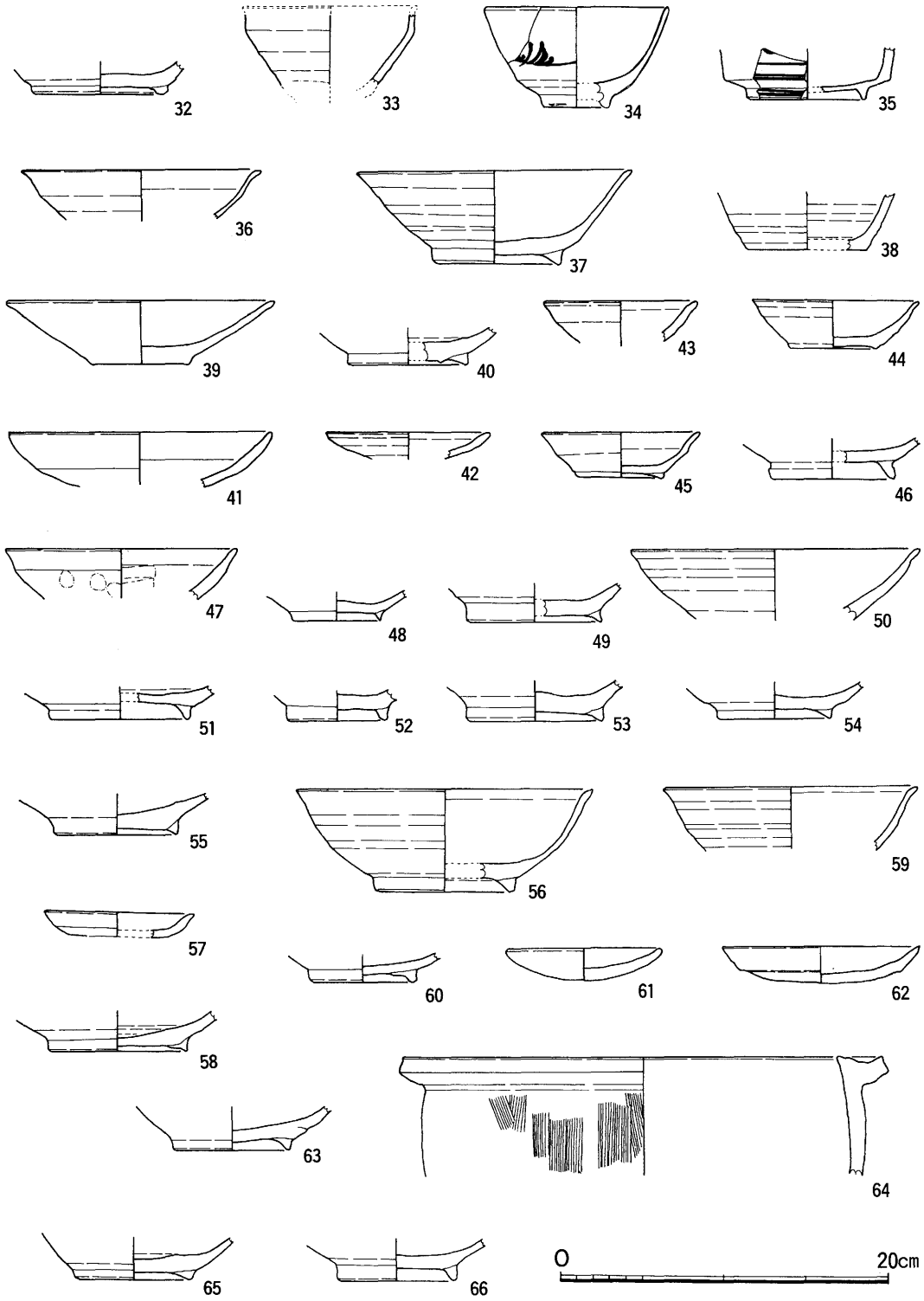
東壁土層図
A
B
L＝9.60
SB01エレベーション
D
E
L＝9.00
1．近代整地土
2．暗灰褐色砂質土
3．黄灰褐色砂質土
4．黄褐色砂質土
5．黄褐色弱砂質土（地山？）
SB04
SB03
SB02
SB01
P121
SK36
SK24
SK23
P80
P72
P81
SK21
P61
SK7
SK41
SK45
P1
P113
SK4
P9
P8
SK5
P25
P34
P27
SK43
P17
SK13
P16
SK1
P12
P14
C
F
N
0
5m
は焼土、焦土
は微細炭化物
東壁土層図
SB01エレベーション
L＝9.00
L＝9.60

第３図　遺物実測図 1



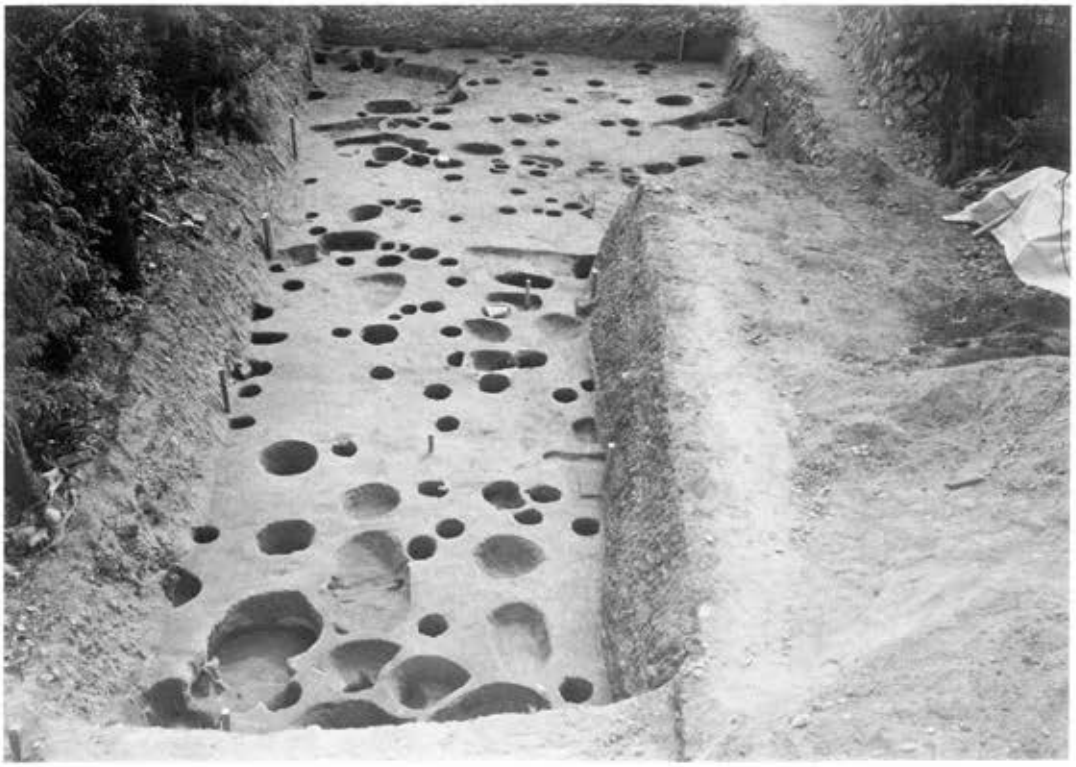
1～18 近代整地土、 19～22 第２層、 23 第３層、 24～31 第４層

第４図　遺物実測図 2



32 SK1, 33 SK4, 34 SK5, 35 SK7, 36･37 SK21, 38 SK23, 39 SK24, 40 SK36, 41~45 SK40, 46 SK41, 47 SK43, 48 SK45, 49 P1, 50~52 P8, 53 P9, 54 P12, 55 P14, 56 P16, 57 P17, 58 P25, 59 P27, 60 P34, 61 P61, 62 P72, 63 P80, 64 P81, 65 P113, 66 P121

図版1　遺構写真　1

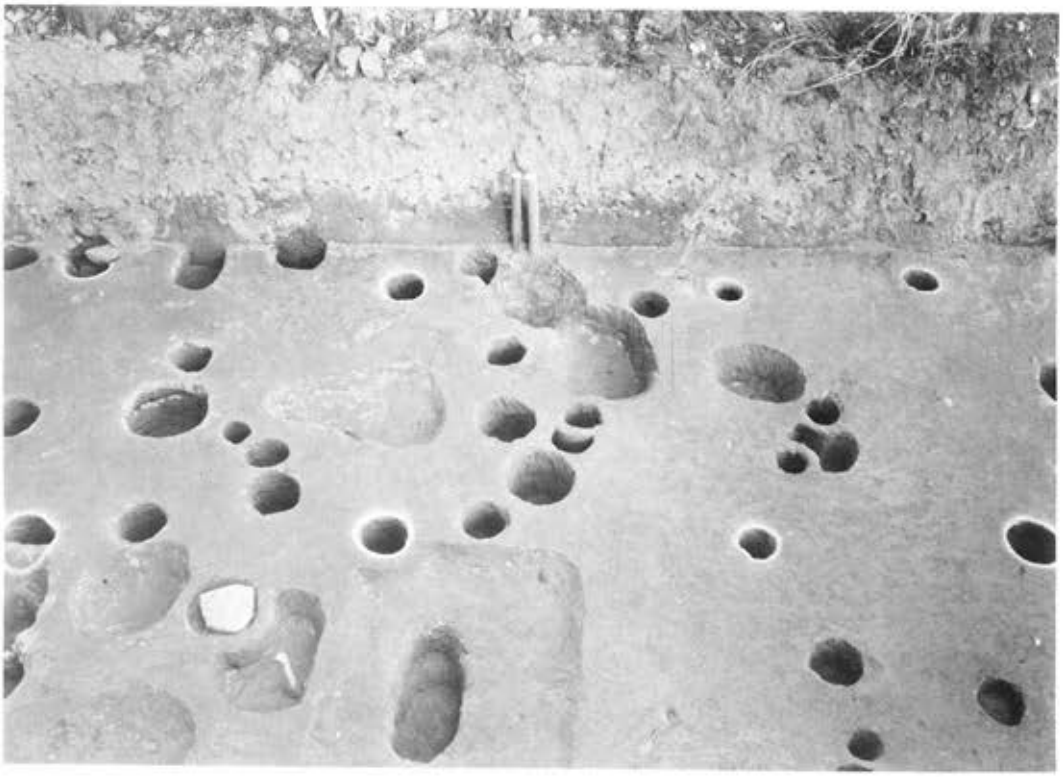


全　景（北から）

同上（南から）

図版２　遺構写真 2

SB01（南から）

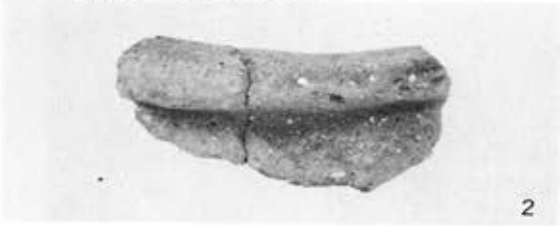


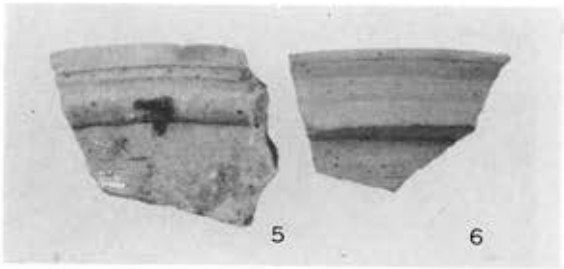
SB2（西から）

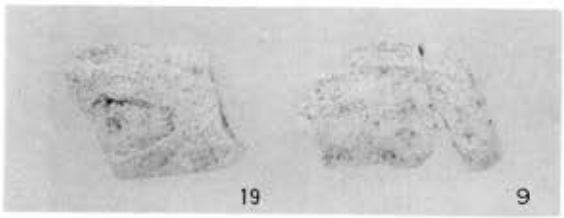
ＳＢ３（西から）

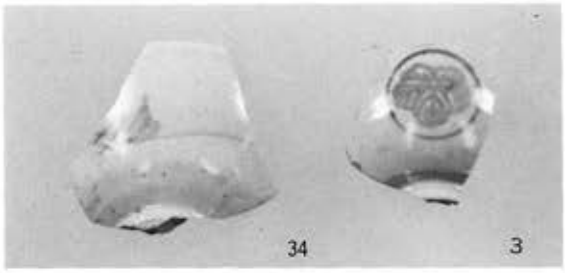
土坑群（南から）

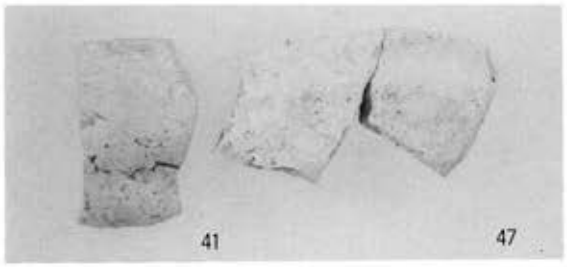
図版4　遺物写真 1








34
3


41
47

37

56

39

39′

16

44

44′

45

45′

64

佐藤春夫記念館建設に伴う

速玉大社境内遺跡発掘調査概報

平成元年３月

発行　（財）和歌山県文化財センター

印刷　邦　上　印　刷